

特集3 | ホスピタリティに見るデザイン

9

DESIGNING FOR HOSPITALITY

ホテルのインテリア
あさば | Asaba

「あさば」は、1489年、浅羽弥九郎幸忠が門前に宿坊を開いたことに始まる。

圧倒的な存在感を放つ賓客門を一步踏み入ると、水面に能舞台が顔を見せ、竹林と木々の緑、滝と風の音、小鳥のさえずり、池のさざ波…。600坪の庭には日常を離れた和やかな世界が広がっている。これが「あさば流」のおもてなしだ。「侘び寂び」が漂うようなシンプルな客室、素材の持ち味を活かした料理、伝統が生きている季節ごとの趣向など、何ごとも控えめに…。いわばマイナスの美学を旨としている。居ながらにして部屋で能を鑑賞できるのが、唯一の贅だろうか。今では、日本はもとより海外からも客を迎え、魅了している。

四季を愛でるおもてなしや、能を中心にした独自のスタイルが評価され、1987年からフランスの「ルレ・エ・シャトー」に加盟した「あさば」。今号は、520年の歴史の中で育まれてきた「あさばの流儀」に迫った。

サロン側から池と能舞台「月桂殿」を見る

520年以上の歴史がある「あさば」は、さまざまな時代を乗り越え今日に至っている。それはまた、建築がその時々時代の波をかぶりながら変遷してきた歴史でもある。池越しの山裾には、加賀前田家から伝わった能舞台「月桂殿」が明治後期に移築され、法隆寺ゆかりの門扉、唐破風の玄関屋根と共に見る人に強い印象を与えている。1998年から始まった改修工事は、能舞台のほぼ正面にあたる1階と2階の

客室を数寄屋の手法で改修するもので、恩師でもあった故・志水正弘先生のもとで設計・監理の仕事に参加させていただいた。「武力や財力など権力の表現方法として利用されてきた多くの建築様式の中で、唯一反権力の精神を形にした建築様式が数寄屋である。茶の湯との結びつきから力の表現を取り去り、禅の助けによって精神美にまで昇華し、人をもてなす旅館と

しては最も適した手法である」というのが志水先生の旅館を設計するにあたっての大前提であったと認識している。旅館における「もてなしの心」は、茶の湯の基本的な心得とも通じるもので、建築空間・季節の設え・涼しさ・暖かさ・料理・器・接客サービスなど、すべての要素がバランスを取りながら、さりげなく供されるものでなくてはならない。建築のみが豪華や華美であっては快適で心地良い空間にはならな

いからである。季節や催しによって変わる設えと使う人が相まって初めて空間が完成するよう、建築は控えめでなくてはならない。数寄屋の主な材料としてスギを中心とした造作材、畳床、じゅらく壁、竿縁天井などがあるが、古来からの手法のみでつくるとすれば必然的に希少な材料を集めた財力の表現となる。また、現在では必要不可欠なエアコンへの対応、防火性能・防音性

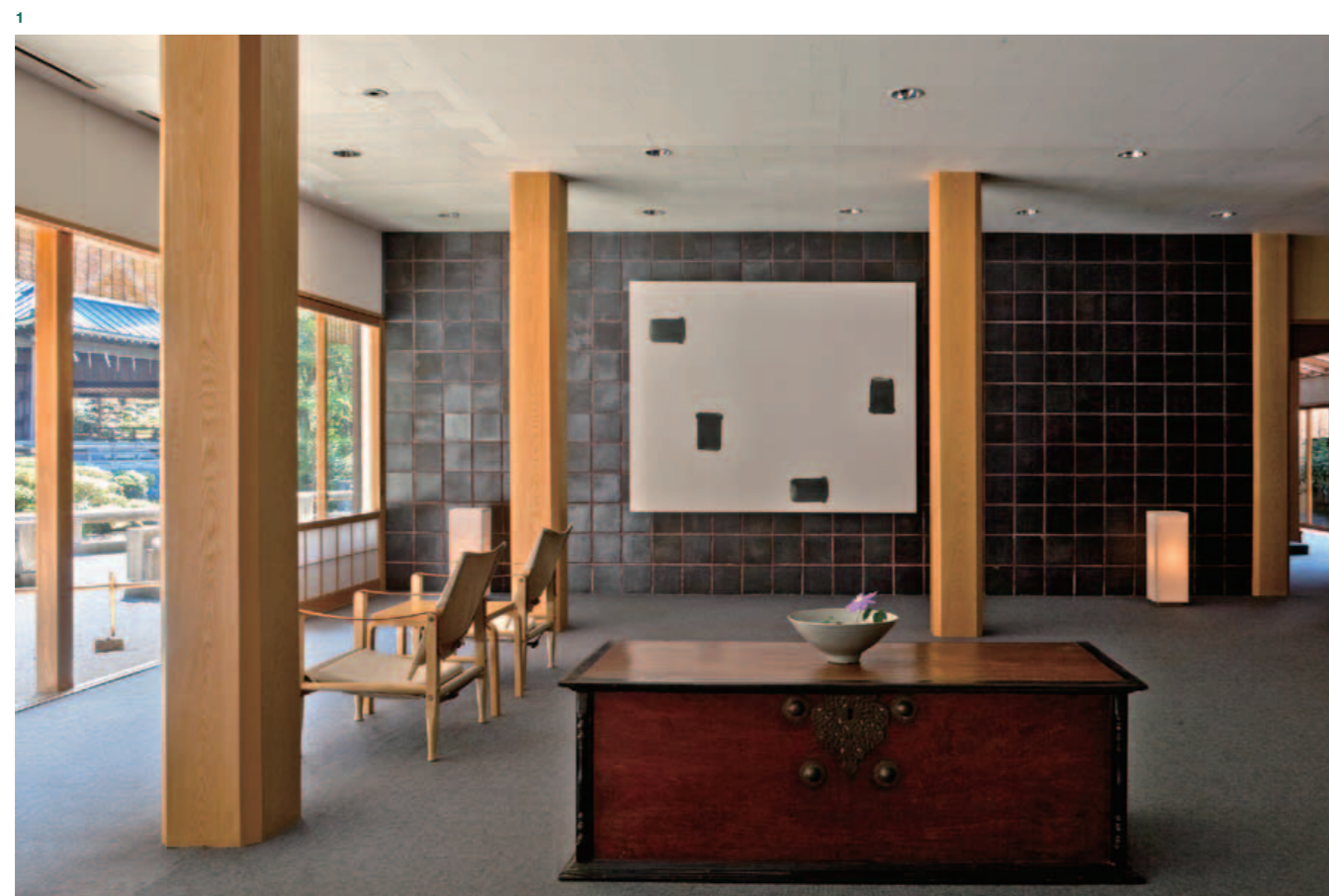
能を確保するためにも、現代の新しい材料や新しい工法も一部取り入れたが、これからは新しい技術による設備機器など、どこまで取り入れ、または排除するかによって数寄屋の表現も修正していく必要がある。その後の改修では、裏方である事務所、お勝手、従業員スペースのリニューアルを含めて順次、客室、宴会場、浴室などの改修を継続的に行っている。将来の展望とし

て、全館の廊下を畳廊下に替える計画がある。これは畳廊下への意匠的改修と併せてスリッパの排除という目的もあり、また玄関・ロビーの在り方や客室へお料理を運ぶ動線の問題も含めて再構成していく必要がある。

DESIGNER'S COMMENT

デザイナーズコメント | 数寄屋の手法による、もてなしの空間の再構築

横川正広 | Masahiro Yokokawa



- 1—ロビー:開口部はすべてガラス戸。開け放つと見床へ、池へとつながっていく
- 2—来客のアプローチ:門を通して唐破風の玄関屋根が見える
- 3—玄関:引き込みガラス戸を開けると、藍染作家の菅原匠による麻の大きな暖簾が風に揺れている。春は水玉、夏は波など、季節ごとに替えられる
- 4—クラシックな雰囲気のリセプションデスク
- 5—すべての階段の手すりは、八角形断面のブビンガ



- 6—モダンアートと一体化したサロン:近くまで池が迫り、竹林や能舞台を眺めながら、お茶やコーヒーを楽しむことができる
- 7—見床(けんどこ):能舞台に向かって雁行した平面のプレキャストコンクリートのデッキは、能などのイベント時には観客席にもなる
- 8—見床とデッキチェア:気候の良い季節にここに座れば、居心地の良さに時間がたつのも忘れる...と、人気のスポット
- 9—竹林に囲まれた野天風呂:浴槽のレベルが池の水面に近く、温泉につかると自然に溶け込んだように感じると評判
- 10—婦人風呂:既存の浴槽はそのままに、床は十和田石張り、壁はヒノキ板張りに改修。窓からは石垣と植栽が見えて美しい

先祖・浅羽弥九郎幸忠が禅師に従い、曹洞宗開山のために修善寺を訪れたのは1489年。その後、堂守として仕えながら門前に宿坊「あさば」を開きました。爾来520年、湯の郷の風土と湯治場の良さを守りながら、17室の宿を引き継ぎ老舗でございます。

このたび「あさばの流儀とは?」というご質問をいただきましたが、あえてお答えすれば、「マイナスの美学」でしょうか。何ごとにお

いても「シンプル」を旨とし、代々の女将の教え「きばって、でばらず、間はずさぬように」と「気配を感じ取ることを身につける。その気配があさば流のきめの細かいおもてなしにつながっております。

また、客室の空間づくりにもそれは生きております。室内はなるべくシンプルに設え、清々しさが漂うように。そして窓から見える池の水と竹林の緑、滝の流れと風の音…など600坪の風光が相まって、そこには真

から心を癒す「あさば」ならではの世界が広がっております。そして季節感は、私どもが最も大切にしていることでございます。さりげなく生けた山野草と軸、そして夏には簾戸を立て池越しの涼風を呼び込むなど、季節ごとに趣を変える妙味も決して主張しないように…。料理もまた、シンプルを基本とし、厳選した旬の素材の持ち味を活かした献立は、当館には欠かせないおもてなしのひとつでございます。

そして何よりも「あさば」の真骨頂は、能舞台「月桂殿」でございます。これは七代目当主・浅羽保右衛門が宝生流の能に興じていたことから、明治後期に深川富岡八幡宮より譲り受け、奉納から次第に旅のお慰みに伝統芸能をご鑑賞いただく趣向に転じました。お客さまが竹林の闇と月明かりを背に、池に浮かぶ石舞台、橋掛かり、「月桂殿」で演じられる古典芸能を堪能するお姿は、私どもの喜びで、これこそ他に

例のない「あさばの流儀」かもしれません。今では「修善寺藝術紀行」としてご宿泊以外のお客さまにもお楽しみいただいております。

四季を愛でるおもてなしや、能を中心とした「あさば」独自のスタイルが評価され、1987年にフランスの「ルレ・エ・シャトー」に加盟いたしました。この協会では、「5C」と銘打つ価値基準を提唱し、おもてなしを始め、料理など、厳しい5部門の審査がご

ざいですが、当旅館は特に“独特のスタイルを持っている点”で高い支持を得ております。今後も、世界的な視野をプラスしつつ、綿々と受け継がれてきた“あさばの流儀”を次代に継承してまいります。(談)

【建築概要】

名称:あさば
所在地:静岡県伊豆市修善寺3450-1
建築面積:1,720.20㎡ | 延床面積:2,951.48㎡ | 客室数:17室 | 創業:1489年 | 改修:1998年- | 改修設計:志水正弘・林公子、横川正広建築設計事務所

HOTEL'S COMMENT

ホテルズコメント | 当たり前のことを当たり前…

浅羽一秀 | Kazuhide Asaba

11



12



13



14



15



- 11—客室・松風:能舞台の正面の2階客室。スギの面皮柱、赤スギの造作材、壁はじゅらく塗り腰紙貼り、天井はスギ中空突き板張り竿縁天井
12—畳敷きの床の間:季節に合わせ花と掛け軸が飾られる
13—座敷から広縁を通して外の竹林や能舞台を望む。写真は、障子を簾戸に替えた夏仕様
14—手すりは座った目線で見ただけ気にならない高さで横材を配置し、外の眺めを邪魔しないようにしている
15—客室・巻絹:石舞台正面の1階客室。床脇の襖は京唐紙貼り

16



17



18



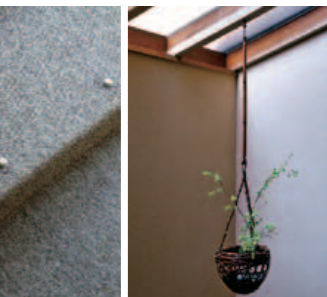
19



20



21



- 16—広縁:見床越しに池の中の石舞台や能舞台の鏡の間が見える
17—赤スギの柱目板の室名札:折れ釘で部屋の入り口脇に掛けられている。室名は能の演目由来する
18—階段踊り場に置かれた“誰が袖屏風”。老舗旅館らしい古式ゆかしい演出が妙味
19—ロビーから客室へ向かう廊下:床は絨毯張り、壁はじゅらく塗り、天井はスギ化粧化粧石膏ボード目透かし竿縁天井。右側に料理を運ぶフゴ通路と庭がある
20—段差部分のピンにも、さりげない気遣いを感じられる | 21—廊下の入隅に飾られた草花にも季節感が…